時代観察者の冒険

1977—1987
全エッセイ

小林信彦

新潮社

時代観察者の冒険

1977—1987
全エッセイ

小林信彦

新潮社

時代観察者の冒険

1987年10月20日発行　1987年11月15日 2刷

■著　者　小林信彦

■発行者　佐藤亮一

■発行所　株式会社新潮社
郵便番号162　東京都新宿区矢来町71　振替東京4—808
電話　業務部(03)266—5111　編集部(03)266—5411

■印刷　大日本印刷株式会社　■製本　加藤製本株式会社

定価1100円

© Nobuhiko Kobayashi, 1987　Printed in Japan
乱丁・落丁本は御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-331811-2 C0095

時代観察者の冒険■目次

■社会時評Ⅰ　1978—1979
情報公害について　10
反・重厚感覚の雑誌のこと　13
生活騒音と狂気　16
書店に何がおこったか　19
外来語の誤用と〈パロディ〉　22
ピンク・レディーとNHK　25
〈郵政紛争〉被害の記　29
〈やさしさ〉の大バーゲン　32
日本列島春景色　35
〈気分はビートルズ〉の世代　38
〈受験競争〉のさなかで　41
〈新しい書評〉について　44

■言語時評　1977
電話のなかの言葉　50
テレビのなかの言葉　52
〈エンタテイナー〉という言葉　53

■社会時評Ⅱ　1978—1986
〈ギャグ・エイジ〉の守護神　58
〈既知〉との遭遇　63
白球を追って　66
〈ひょうきん〉のこと　69
こだわり続けること　72
架空インタビュー1984　75
〈アイドル〉の時代　82
〈青春〉の逆襲　85
けむりが眼にしみる　89

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アダルト伊代ちゃんの暴力性　93
時代のトンネルを抜けると、とんねるずだった　96
とんねるずに見る70年代症候群　99
アイドルの自殺と「じゃあね」　102
現代の奇妙な〈明るさ〉　105

■日記から　*1981*
円丈・春輔二人会　110
吉田日出子ショウ　111
冗談　112
芸人　113
講演　114
憎悪　115
熱球の日々　116
粗忽　117
流行　118
狼がきた　119
散歩と爆弾　120
理想主義者　121

■ニューヨークから
相互誤解　124
ブロードウェイ1981　129
消えた書店　142

■東京のこと
下町の夏　148
花火の町　150
まだ見ぬ読者への手紙　154
町人文化への道　156

〈東京考古学〉のすすめ 160
山の手の穴 163
映画『流れる』――架空世界の方位学 164

■十人十色
親切な人 178
男の世界 179
ヨコの関係 181
叱られて 182
お酒飲む人 184
個人主義者 185
変身願望 187
笑う友達 189
きょうだい 190
飲めない人 192
パーティーぎらい 193
老婆心 195
テレビの害 196
弱点長所説 198
七日の客 200
平凡な名前 201
つっぱり 203
タブー 204
ラジオの害 206
批評と忠告 208
世代ばなれ 209

■作家と作品
もう一人の〈北杜夫〉 212
『筒井康隆劇場 12人の浮かれる男』 215

十日前の会話　218
大岡昇平『成城だより』　222
構成力と予知能力　226
物語の内なる「私」　227

■自作の周辺

おだやかでない近況　234
大阪弁の問題　235
転換期の文学――『夢の砦』とその構築　237
俳句・のようなもの　242
『夢の砦』の出版をめぐる不安　246
60年代翻訳雑誌グラフィティ　250
『夢の砦』と風俗　252
喜劇的想像力の訓練　254
日記と狂気　257
『ぼくたちの好きな戦争』をめぐって　259

■本と書評の周辺

書評の真贋　264
編集者評論のすすめ　268
無神経な〈小説ダイジェスト〉を追放せよ！　272
主として『アト・ランダム』について　276
読者との回路について　279

■原初の風景

原初の風景――または、文化装置としての自己　286
注にひとしい〈あとがき〉　300
発表誌紙一覧　302

装幀　平野甲賀

時代観察者の冒険

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

社会時評 I

1978—1979

情報公害について

『スター・ウォーズ』と名づけられた映画が、全米でヒットしたニュースが日本で報じられたのは、昨年（一九七七年）の六月であった。

製作会社でさえ首をかしげていた荒唐無稽な宇宙活劇がとてつもないヒット作に〈化けた〉という噂、アメリカにいてもなかなか観られないほど劇場が混んでいるという情報がとび交い、七月になると、ロスで観てきたという人が、私の知己にも何人かいた。感想はいずれも、むちゃくちゃに面白い、というものだった。

〈『スター・ウォーズ』現象〉が日本で燃えひろがったのは秋に入ってからだ。この時点で、日本での『スター・ウォーズ』封切りは来年（すなわち今年＝一九七八年）七月と発表され、一般観客はおあずけを食った形になった。当分は観られないという大前提のもとに、日本ではもちろん、世界にも類をみない珍奇な現象が、わが国に起り始めたのである。

アメリカ映画の大作は、そう時間を置かずに日本でも公開されるのが常である。『ジョーズ』が半年遅れて公開されたというのが、いままでの〈お待たせ記録〉だが、『スター・ウォーズ』はそれをはるかに上まわる〈お待たせ〉である。

『スター・ウォーズ』に関する情報収集熱が高まり始めた。それに応じて、ロスやハワイで『ス

ター・ウォーズ』を観てきた人たちがラジオの深夜放送でしゃべりまくり、若い人向きの雑誌に書きまくった。『スター・ウォーズ』を観た人たちによる熱狂的な座談会がSF雑誌にのり、やがて、名場面がカラー写真で紹介され、ストーリー紹介というよりは、場面解説が微に入り細をうがっておこなわれた。登場人物やロボットの特性も、こまかく説明された。

晩秋になると、『スター・ウォーズ』を観ていないのは、私ひとりではないかとさえ思えてきた。『スター・ウォーズ』を観るツアーというのがあって、高校生までがアメリカ本土に渡っていた。忙しい人たち（たとえばミュージシャン）はグアム島で観てきた。もはや、『スター・ウォーズ』を何回観たかというのが問題になっていたのだ。わが国の映画会社は、『スター・ウォーズ』の上陸前に、『惑星大戦争』『宇宙からのメッセージ』の二作を即席で作り、封切ってしまった……。

いったい、これは何であろうか？　この現象というか、ブームを支えたのは、小、中学生、高校生から三十歳ぐらいまでの人々であるが、『スター・ウォーズ』に関するあらゆる情報を集め尽した少年が、では、勇んで、公開された映画を観に行ったかというと、どうも、そうではないらしいのだ。私の娘なども、あれほど熱狂していたのに、映画館にかけつけるわけでもなく、いまや『さらば宇宙戦艦ヤマト』の情報を仕込むために、試験の前夜、三時までラジオをきいている。

こうした経過をみていると、映画や小説に白紙の状態で接するのを旨としている私などは、とまどわざるをえない。彼らは、一本の映画に接するまえに、あらゆる情報（音楽、ストーリー、名場面）を仕込み、その映画を〈知って〉しまうのである。従って、じっさいに作品に接することは、仕込んだ情報の〈確認〉〈裏づけ〉に過ぎない。

いうまでもなく、私は『スター・ウォーズ』という作品の内容を云々しているわけではないし、

ここはそうした場でもない。ただ、輸入映画史上、最大限の情報を氾濫させた映画が、どういう運命を辿るかには、私なりの興味があるのだ。

『スター・ウォーズ』をめぐる大騒ぎは、情報社会が行きつく一つの姿を暗示していると私には思われる。情報が先行して、作品そのものの出来や質の検討はどこかへ吹っとんでしまう。ふと思い当ったのだが、熱狂的賛美と、それに対する感情的反撥の二つを除いて、私は、まだ、この映画についての、まとまった批評を一つとして読んでいないのだ！

数年ぶりに深夜のラジオをきいて、びっくりしたのだが、アメリカのその日の出来事を報ずる時間があり、役者のだれだれが死んだとか、ロック歌手のだれそれが怪我をしたとか、早口に伝えられる。

このスピードからいえば、ディスコ・ブームに火をつけた映画『サタデー・ナイト・フィーバー』がアメリカとカナダで大記録を作ったなどというのは、旧聞に属することだろう。〈ディスコ映画〉という伝わり方のために、私はこの映画の試写をなかなか観なかったのだが、アメリカで観てきた弟に、「錦糸町のアンちゃん風の主人公が、ぎんぎらぎんで出てくる映画だ。面白いよ」と言われて、あわてて観に行った。

内容はきわめてまっとうな青春映画で、ブルックリンに住むイタリア系移民の家族のもとを逃れた貧しい青年が、そのうっくつを夜のディスコでの踊りで晴らす日常を描いた、苦い作品であった。そういった作品が、〈ディスコ映画〉といった安直な呼び方によって、まったく違ったイメージをひろげてゆくのは、『スター・ウォーズ』とは別な意味で、考えさせられた。私など、映画の初めから終りまでディスコ・サウンドだけの映画だと思い込んでいたからだ。これなども、

情報公害の一ケースといえるのではあるまいか。

反・重厚感覚の雑誌のこと

読みたい雑誌、これだけは読んでおかねばならないと思う雑誌がなくなった、と、私と同世代のだれもが言う。三十代の人たちも、同じ嘆きをくりかえしている。

そうした雑誌とは、私個人の場合、昭和二十年代の「世界」であり、三十年代の「エラリイ・クイーンズ・ミステリ・マガジン」であった。ひとによっては臼井吉見編集の「展望」をあげるかも知れない。また、故福島正実編集の「ＳＦマガジン」、佐藤忠男編集の「映画評論」も考えられる。いずれもアクが強く、ガンコな人物によって編集されたもので、雑誌というものは一人芸なのだな、と、つくづく思う。衆知を集めた編集など、じつは、ありはしないのだ。

総合雑誌はもうダメで、オーディオとか、ＦＭの専門誌、あるいは「ぴあ」のような情報誌が求められる、というのがここ数年の傾向で、そういわれてみると、私も、「ぴあ」は必ず買っているのに気づいた。

ひとことで言ってしまえば、私がぜひとも読みたい雑誌は、やはり、ない。だから、いろいろな雑誌を頭の中でバラして、つなぎ合せることになる。

そのさい、ベースになるのは、月二回発行の「ポパイ」である。「ポパイ」は、もちろん、ポ

バイ・ザ・セーラーマンのポパイだが、POP・EYE（大衆文化への眼）の意味もあるのではなかろうか。

雑誌「ポパイ」を、〈自分にはカンケイのないもの〉と考えている人が多いが、とんでもないことである。これは、あの莫迦莫迦しい〈メンズ・マガジン〉のたぐいではなく、カタログ雑誌でもない。ニューヨークで、この「ポパイ」が紹介された記事を引用すれば、〈都会の若者のミニコミ誌のていさいを保ちつつ、あらゆる種類のプレイ情報をつめ込んだマガジン〉であり、〈マイコンのプログラミングからロンドンで流行中のクロスオーバーのナンバー、カリフォルニアの運転免許試験の問題集、スピールバーグの新作映画の筋書き、バックパッキングの装備〉までが入っているというわけだ。

もっと正確に書けば、これらの情報が、「コラム形式」でつまっているところに特徴があり、一九六〇年代の「朝日ジャーナル」に匹敵する意味をもつ雑誌という、おおかたの見方に異論はない。〈むかしジャーナル、いまポパイ〉といわれるゆえんである。

「ポパイ」が爆発的に売れたのは、なんといっても、〈都市中間層意識〉の日本全土への浸透にある。いまでは、イナカに住んでいても、だれもイナカとは思っていないのだから仕方がない。かなりへんぴな土地に住んでいる青年でも、自分を〈シティボーイ〉だと考え、スケートボードを買ったり、汚染された海でサーフィンをやったりしているらしいから、ちょっとかなわない気がする。

要するに、自分がどれだけ苦しんだか、という〈苦悩の押し売り〉のイナカ文化の時代は終ったのである。そうしたエセ重厚文化の時代が終ったのはまことにけっこうだが、だからといって、〈軽さの文化〉ばんざいといえるほど、私は楽観的ではない。重厚文化が虚妄であるように、軽

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com